

特集

未来を担う子どもたち

ジュニアのボランティア活動

平成14年度より、全国の小・中学校では「総合的な学習の時間」が施行。あわせて、小・中・高等学校等で学校週5日制が実施されることとなり、児童・生徒たちのV活動や体験学習への参加がより活発になると予想されています。

そこで今回の特集は、大人のボランティアとともに活動を行う中学生・高校生たちと、自らの考えて企画を進める小学生たちの取り組みを紹介します。未来のV活動を担うジュニアたちは、どのような想いで活動し、どのような気づきを得たのでしょうか。子どもたちの新たな活動をまとめてみました。

同世代の立場で 相談に応じます

佐賀地区 Jr.BBS会

(佐賀県佐賀市)

全国初のジュニア組織

BBS(Big Brothers and Sisters Movement)とは、18才から30才前半の青年Vが、少年少女たちの「兄」や「姉」のような存在として相談にのるなど、非行防止に取り組むV活動で、法務省保護局の指導のもと、全国で約6,000名以上が活動している。

佐賀県BBS連盟では、社会人や大学生など約120名の会員が所属しているが、もともと数名のジュニアが青年Vとともに活動に参加していた。昨年5月、日本BBS連盟会長の呼びかけをきっかけに、ジュニアとして組織化することを決定。

こうして、平成13年9月30日、佐賀地区の高校生5名と中学生1名からなる「Jr.BBS会」が全国で初めて誕生した(平成14年3月現在)。

青年ボランティアとともに活動に参加

ジュニアたちは、青年Vとともに、地域の児童の自立支援を目的に行われる「児童養護施設での学習指導」や福祉施設等で行われる



例会の様子。良いアイデアは生まれたかな？

「イベントのVスタッフ」などに参加。

同地区連盟会長は、「学習指導では、高校生Vが中学生を教えることができる」。また、「10代の考え方や新しい流行などは、20代・30代では理解できないこともある。年代が一番近いジュニアなら、同じ立場で接することができ、対象者も気軽に接することができる」と、ジュニアの効果を挙げる。

専門性が要求されるBBS活動では、研修会への参加も重要。「電話カウンセリング」や「虐待養育放棄」の研修など、スキルアップをめざしてジュニアも参加。「もっとBBSの活動を知ってほしい」「もっとジュニアの会員を増やしたい」との想いで、広報活動も行っている。

「Jr.BBS会」メンバーにうかがいました！



藤佐磨意子さん(会長/高校1年)

両親がずっと会員だったので、幼い頃から活動のお手伝いをしていました。学習指導では、同年代ということで、仲良くなれる反面、逆に遊びすぎてしまうことも。

活動を通して心がけていることは、「守秘義務は絶対に守ること」。また、本来であれば18歳以上の参加ですが、「ジュニアだからといって、甘えは許されない」との想いで活動しています。ジュニアの特性を活かしながら、社会人に負けない活動をめざしたいです。



川崎悠紀子さん(副会長/高校3年)

学習指導では、対象者の心にどこまで踏み込んでいいのか戸惑いましたが、心はオープンに、頭では冷静に考えて接するようになっていました。4月から私は横浜の大学に入学することになりましたが、そちらでもBBSを探して、今後も活動を続けていくつもりです。



山本なつみさん(事務局/高校1年)

入会する前は、「BBS」=「非行少年の更正」というイメージがあったのですが、実際には親の事情により、施設で生活している子どもたちと接することもあるなど、活動してみて初めてわかったことが多々ありました。

活動を通して、もっと仲良くなって、個人的な相談を受けるくらい役に立ってほしいと思っています。



永石光一君(高校1年)

もともとV活動に興味がありました。部活が終わってからの活動の場合、帰宅が遅くなることもあるけど、もっといろんな知識を増やして活動の幅を広げていきたい。サークルの中心となって活動されている大学生会員の方がいますが、リーダーシップなど見習いたいです。

災害復興住宅の高齢者と小学生の交流イベント

神戸市立長田南小学校
(兵庫県神戸市)

子どもと高齢者が一緒に楽しむ

長田区では災害復興住宅が40棟を超え、その多くは1棟100戸以下の中規模住宅である。地域の学校と協力し、小学校の児童と入居者との交流を図ることを目的に、平成10年より「キッズサポート」を実施している長田区社協は、校区内に高齢者復興住宅(フレール長田大道)が建てられたのをきっかけに、長田南小学校にも協力を呼びかけた。

総合的な学習の時間を見据えて、V学習プログラムを模索していた同校では、社協と様々な意見交換を交わす中で、子どもが高齢者に「してあげる」のではなく、子どもも高齢者も「一緒に楽しむ」活動を提案。こうして平成12年3月4日、第1回目の「餅つきまつり」が行われた。

企画も準備も子どもたちの手で

「笑顔が集まる餅つきまつり」(以下、まつり)と名付けられたこの交流イベントは、同校5年生の恒例行事となっている。

今年も3月に3回目となる「まつり」を実施したが、今年は特に、子どもたちの写真が入ったカードを作り、「65才以上の一人暮らしの高齢者」を対象に、自己紹介を兼ねて訪問。また、できるだけ多くの高齢者に参加していただくために、お宅を何度も訪問したり、事前にポスターを作ったりするなど、様々な準備を行った。



集会所の高齢者に戦争体験のインタビュー

当日は、「餅つき係・丸める係」「豚汁係・ぜんざい係」「配膳係」などの役割に分かれ、それぞれが役割を受け持ち大活躍。また、6月に学校の歴史授業で行われる「戦争体験学習」に向けて、「インタビュー係」は高齢者から戦争体験のお話も伺った。

つきたてのお餅に高齢者も大喜び。なかには、子どもに餅つきの「あいどり」をアドバイスする高齢者もいるなど、子どもと高齢者が力を合わせての交流イベントとなった。



美味しい豚汁
できるかな?



高齢者のあいどりで、
餅をつく男子児童

イベントだけにとどまらない、交流へとつながりました



神戸市立長田南小学校 教諭
青山義久さん

3月2日の当日に向け、前年12月頃より企画準備に入りました。教師側からすると、「お年寄りに何をすることができるか」「困っていることはないか」という取り組みをと考えていたのですが、子どもたちから「昔はすごかったんだよ、という話を聞いてみると良い」という意見が出るなど、子どもたち主導で企画が進みました。

フレール長田大道には、65才以上の一人暮らしのお年寄りが24名入居されておりますが、「最初はドアも開けてくれなかったお年寄りが、何度も訪問するうちに打ち解け合い、当日も参加してくれて嬉

しかった」「私たちの訪問を涙を流すほど喜んでくれた」と子どもたちの感想にあるように、準備の段階で既に、子どもたちとお年寄りとの交流は始まっていたのです。そうした成果が、今年はエプロン持参で参加してくれたり、子どもと一緒に餅つきをされるなど、例年になくお年寄りが参加してくれ、つくづく「継続は力なり」と思いました。

また、「自分でも人の役に立ち、喜んでもらえることがわかった」「戦争時代に、ものすごい苦勞をされたんだ」と、子どもたちは様々な気づきを与えられました。

訪問活動は今でも継続していますが、これは6月の「戦争体験学習」に参加していただきたい、とのねらいがあります。しかし、「学校で何かイベントがあった時には、おばあちゃんに伝えてみたい」「おじいちゃんが訪問を楽しみに待っている」など、ねらいを超えた交流へとつながっています。

ジュニアの可能性を 広げるために

無限の可能性を秘めたジュニアたち。その可能性を広げるために、私たちはどんなサポートをすればよいのでしょうか。

このページでは、ジュニアのV活動の意義をあらためて考えるとともに、学校・地域・社協それぞれの立場からコーディネートのポイントについてまとめてみました。

ジュニアV活動の意義と可能性

ボランティアの新たな力として

新興住宅街などでは、都心に働きに出かける大人が多いため平日のV活動者が不足しているのが現状。また、高齢化が進みV活動へのニーズがますます高まる中、ボランティアの「新たな力」としてジュニアへの期待は高まっている。

地域の大人を巻き込んだ活動ができる

ジュニアの親の世代は忙しくて地域に出る機会が少ないが、我が子とともにV参加する親御さんも増えている。また、地域の大人もジュニアに「お願い」されれば嫌とは言えないもの。地域のイ

ベントなどにジュニアが参加することで、より多くの大人の参加が得ることができる。

子どもが地域に帰ってくる

いじめや非行、暴力など少年犯罪の深刻化が叫ばれる昨今だが、「子どもと地域社会との関わり」が希薄になったことが要因の一つと言える。「総合的な学習の時間」「学校週5日制」の実施によって、柔軟な心をもったジュニアたちが福祉やV活動に目覚め、地域とふれあう機会が増えることは、ジュニア自身にとって、地域にとって大きなメリットとなる。

ジュニアのV活動をコーディネートする際のポイント

学校の担当教員

地域主体の活動を視野に入れた学習プログラム

月曜日から金曜日までの「総合的な学習の時間」内における学習の成果が、土曜日・日曜日での地域主体の活動、という認識に立って学習を進めていく必要がある。そのためには、地域の様々な場所へフィールドワークに出かけたり、地域の大人と関わりを持てるような学習プログラムを展開する。また、担当教員は「地域でどんな活動が行われているか」という情報を常に把握しておくことが大切。

ジュニアが主役となる演出

学習プログラムを進める場合、基本的な骨子は教員が立てるにせよ、企画や準備のアイデアはジュニアが出し合うなど、ジュニアの自主性を活かすよう学習を進める。また、V活動や体験学習は、日頃の授業であまり出番のない子どもも活躍できるチャンス。一人ひとりの個性を活かしながら、社会課題に気づき、解決する力を育みたい。そのためには、ジュニアが自分自身で「気づきを得た」という演出をするとジュニアの自信にもつながり効果的。

ジュニアだからといって甘えは禁物

ジュニアとはいえ、地域の中で活動を行う以上、責任を持って参加する必要がある。振り返りや反省会などを行う場合、「良い点は評価し、反省すべき点はきちんと叱る」という姿勢をもつことが大切。

地域のボランティア・市民活動プロデューサー

ジュニアの自主性を活かす

学校での学習と同様に、地域においても、ジュニアの意見やア

イデアを活動に活かすという視点がないと、子どもたちが単なる「大人のお手伝い」になってしまう。地域はV活動を体験するための絶好のフィールドなので、学校と連携しながら、活動の場所や時間などの情報を提供し、ジュニアに活動のきっかけの場をつくるのが大切。

企画から参加する

地域へのV参加は、まつりやイベントなどの恒例行事の場合が多い。こうした行事を活性化するためにも、単なるイベントスタッフのお手伝いではなく、ジュニアが毎回企画から参加し、アイデアや意見を出し合える機会をつくる必要がある。

社協のVコーディネーター

ふだんから学校に出入りし、信頼関係を築く

例えば、募金などの収集箱を学校に置かせてもらい、回収をきっかけに教員と話す機会を得る。また、車いすやアイマスクなど福祉機器の貸出を学校へ搬入するサービスを行い、学校との関わりを深めていく。こうした日常的な関わりを通して、教員との信頼関係を築いておくことが大切。

学校と地域の架け橋となる

福祉やV活動への理解をより深いものにするためにも、障害当事者や地域の関係機関にも協力を得るなど、学習プログラムの中に様々な地域資源を活用することが大切。社協は、学校と地域をつなげたり、場合によっては、学校と学校、学校と複数の地域をつなぐ架け橋となることが期待される。

本誌の編集委員であり、Vコーディネーターでもある中溝さんにお話を伺い、ジュニアのV活動について現場の立場から語っていただきました。

地域と関わるきっかけが生まれ、 子どもたちの生き方の可能性が広がりました



神戸市立鶴台中学校 教諭
中溝茂雄さん

本校区では、震災をきっかけに、地域福祉と地域防災を兼ねた取り組みとして「防災福祉コミュニティー」が組織化されています。これは地域主体の取り組みで、その中に、「防災ジュニアチーム」がありますが、子どもたちは防災訓練をしたり、高齢者のゴミ出しのお手伝いをするなどの訪問活動につなげることを目的に始まりました。総合的な学習の時間では、防災や福祉、町づくり、V活動などをテーマとしていますので、本校も地域と連携して、この

取り組みに協力しています。

また本校独自の活動として、高齢者向けの災害復興住宅での「ふれあい喫茶」があります。子どもたちは、喫茶に訪れるお年寄りとの交流をはじめ、閉じこもりがちなお年寄りをお誘いしたり、出前のサービスも行っています。また、地域のイベントやおまつりへの、企画からの参加募集がありますが、これは地域の方たちが子どもたちの力を期待しているあらわれかと思えます。

今年度より、全国の公立学校において「総合的な学習の時間」「学校週5日制」が実施されています。この制度については様々な議論がありますが、今までは授業と部活動という2つの枠組みの中で学校と家庭を報復していた子どもたちが、「地域」と関わる機会を得ることで、子どもたち自身の生き方の可能性を広げる大きなチャンスだと思えます。子どもたちがV活動に目覚め、地域の様々なフィールドで活動を行うことは、より豊かな社会へとつながることであります。